



げ しゅ 「下種の期間」 ～土壁に咲く花を夢見て～



第7回 最終回 原点回帰による全能性の奪還

所属 建築研究所
主任研究員 水上 点晴

大正時代の洋館を移築することを決意した顛末は、第2回に示したが、自分でも説明がつかない本能的な決断であった。今となれば、研究者として専門分化や最新技術を極める道筋で袋小路に迷い入り、こぼれ落ちていく可能性を必死に拾い集めようとする中で、なんとかバランスを保とうとするものがきだったように思われる。しかしながら、ノスタルジーとして、後ろ向きに、感傷に浸っては駄目だという思いも一方ではあり、手探りで始めた「動詞としての建築」が、何故、喜びにつながっているのかに確信を持てたのは、家づくりも終盤となった最近のことである。

2023年冬、北海道、当麻山の町営スキー場で、テレマークスキーを教えてもらった。テレマークは、スキーの原点であり、クロスカントリーのように細い板で、雪の上を歩くことができるよう、踵が固定されておらず、持ち上げられる機構となっている。更にはその状態のまま、アルペンのように斜面を滑走することもでき、この場合、左右の板をぴったりと重ねるのではなく、前後にずらす。板にカーヴィングが施されていない分、後ろ足になる母指球で、大地にしっかりと体重を載せながら、滑るというよりは走るように斜面を下る。まるで自分が白鳥にもなったつもりで、水面に降り立つときのように、大地に生身の自分を投げ出すとき、動物であった頃の野性味が、歓喜と共に甦ってくるように感じた。

その後、六花亭に寄り、「サイロ」という雑誌をもらった。小学生の詩集になっており、1年生の詩の方が、上級生よりも言葉足らずではあるが、心揺さぶられるものを感じた。その理由が、形容詞がなく、主語と動詞で生きている実感が直接伝わってくることで、そして語彙が少ない分、1つの単語が担う意味が固定されていなく、その自由度の高さが、危

うさと裏腹に無限大の可能性を感じさせるからだと思いついた。この2つの経験から、進化や専門分化の代償に手放してしまった、大いなる可能性と生を謳歌する喜びが、修飾を伴わないありのままの命には、まだ消えずにいることを確認して、家づくりを始めた頃の自分と重ね合わせて安堵したのである。

遡ること2012年、京都大学の山中伸弥教授がノーベル賞を受賞された。授賞理由は、成熟した細胞を、多能性を持つ細胞へとリセットするのに、驚くほどシンプルなレシピを示したことだ。人の身体は、受精卵という1つの細胞が、細胞分裂を繰り返し、その度にお互い徐々に違うものになっていくことで形作られる。身体の中のどの部品も、全設計図（約2万2千個の遺伝子）をコピーして保持しているが、専門分化によって必要でなくなった遺伝子は、不活性化されていく。そしていったんオフにしてしまうと普通、元には戻せない。それをわずか4個の遺伝子を再び活性化させるだけで、専門分化が完了している大人の皮膚等、どこにでも見られる細胞を、何にでも変化しうる未分化の状態に戻すことができることを証明したのが、人工・多能性幹細胞と記されるinduced pluripotent stem cell、頭物字を取ってiPS細胞と呼ばれるものである。

この概念を分かりやすく示すのに、ワディントン・ランドスケープと呼ばれる絵がよく用いられる。写真は、洋館を移築している周囲の里山の風景を映したものであるが、同様のものである。この丘の頂上が多能性を持つ幹細胞であり、いくつかの谷の1つ1つが、分化の終着点である様々な臓器や皮膚等の細胞と見てほしい。頂上に置かれた石がいったん転がり出せば、どこかの谷底にたどり着く、これが細胞分裂である。逆戻りの道は険しく、通常起こりえないが、これをスタート地点に戻す方法を示したの



周囲の里山の風景

が、山中教授の研究である。

この世紀の発見を、我が事として消化することが出来たのは、最近のことである。早春の田園地帯を散歩した帰り道、我が家の建つ丘上に向かって歩を進めながら、そうか古民家再生と自力建設のいずれも、iPS細胞と同じく、「原点回帰による全能性の奪還」を目指していたのだと腑に落ちたのだ。

古民家は、土壁や茅葺など、周囲の環境で手に入られる自然の素材で出来ている。発生の段階において、補給がなくとも自給で賄える点、また真壁の特徴である、外壁と内装の専門分化が未分である点で、幹細胞に近い。そして、第4回のトイレのアーチに見たように、土壁は形の制約を受けないばかりか、設計者ではなく、施工者である左官に、調合や仕上げがゆだねられており、表現に多様な可能性を有している。また失敗したり気に入らなければ、何度も壊してやり直すことができる可塑性を有している。同様に自力建設は、施工者と居住者が未分であるだけでなく、開拓に始まり、基礎に大工、屋根に左官と職種においても未分となる。それゆえ、技能の習熟度には制限がかかるかもしれないが、家にこめる想いを持つ者が、直接表現者となることの可能性は計り知れない。ましてやその想いや哲学も、家を作る経験からのフィードバックで醸成されるのだとすれば、家が、そして自身が、時点更新されていく双方向の働きとなる。これは正に、遺伝子レベルでの活性／不活性化が身体に及ぼす働き、そして周囲の環境に臨機応変に対応する生命の働きに比類されるのではないかと思う。古民家再生をノスタルジ

ーに浸る後ろ向きな行為なのではないかと、自力建設を専門性を放棄したお遊びに過ぎないのではないかと、不安に感じていたが、連載を終えた今は、原点回帰のこれらの道はむしろ険しく、畏れはすれども紛うことなき、可能性と喜びにあふれた旅路であると確信するに至った。



屋根も左官も…職種未分の家づくり

最後に、サミュエル＝ウルマンの「青春の詩」を挙げて、「下種の期間」の結びとしたい。

70歳であろうと16歳であろうと 人は誰でも持ち得るのだ。

何をか。驚異への素朴な愛慕心、夜空の星、そのきらめきにも似た美しい出来事や思想に対する憧憬、事態に直面した時の毅然とした挑戦、未知に対する子供のように強い好奇心、人生への興味と歓喜。

そうだ。大自然から、人から、そして、創造主から語りかけられている「美と喜び」「勇気と壮大さと力」そうしたメッセージに耳を傾けている限り、君は若いのだ。